

塞北行紀の一節



一圖 陰山

昭和十三年八月北京に遊び、九月京綏線を北上して包頭を訪ぶ。此の間そこはかとなく書きつけたる断片の記事を、整理する暇もなくて机上に棄て置きけるに、東洋史研究の編者より需められ、青塚白塔訪紀の一節のみを抄出して、こゝに掲ぐることゝせり。かりそめの旅とて、もとより携へ行きたる書物もなし。稿中一二他書を引きたるは、今淨書に當りて参照附加せるなり。

九月八日午後十時十五分平地泉驛を發す。大同より三時間餘、北へとのみひた向きに走りし列車は、こゝに方向を西に轉じたり。午後一時北の陰山に南の一山脈が逼りて成せる峠間の一驛に達す。旗下營なり。こゝを出づれば南は平野遠く開け、たゞ有史以來、幕南の苑囿として北族の愛着したる大陰山のみ北を遮る屏風にも似て、果てしもなく西に亘れり。これより包頭に至る一帶の地域、氣候比較的溫和にして、樹木も繁茂し、農作にも適せるは、この山の寒風を遮断する恩惠に依るといふ。雪も僅に二寸位に過ぎずと同車の老少尉はいへり。窗外高梁の